2020年10月18日　久宝教会　聖霊降臨節第21主日礼拝

メッセージ「国籍は天に、暮らしはこの場所に」牛田匡牧師

聖書　フィリピの信徒への手紙　3章5－21節

今日は良い天気に恵まれましたが、昨日は一日中雨が降っていて肌寒い一日でした。先週に引き続き、運動会が予定されていた保育園も多かったと思いますが、2週連続土曜日が雨ということで、今日行われている所もあるようです。例年であれば、運動会と言えば、家族みんなで応援に行って楽しむはずですが、今年は新型コロナ対策のために、3 密にならないように、時間を区切ったり、見学・応援する参加者の人数を制限したり、例年とは異なる形での運動会が、準備されて来ていました。コロナ禍の中でも、運動会を中止としてしまうのではなく、多少、形は変わったとしても、身体を動かすことの出来る喜びを、みんなで喜び祝い、感謝できる時を持てることは、子どもたちにとっても、また大人たちにとっても、大切なことのように思います。

保育園の先生から、「運動会に関連するような聖書の言葉はありませんか」と言われて、私の頭の中にすぐに思い浮かんだのが、今回の聖書の言葉でした。『フィリピの信徒への手紙』3章の13節14節です。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」

ここではパウロは、自分たちの歩みをいわゆる「駆けっこ」、陸上競技に譬えています。私たちが「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神の賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」……。実際の競争には、1着、2着のように順位があり、全員が表彰されるわけではありません。そのために「賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」と言われると、大変過酷な道のように感じますが、これは飽くまでも「たとえ」であって、要するに「後ろのもの」ではなく、「前のもの」に全身全霊を向ける姿勢、心構えが大切だよ、と言われているのだと思います。

では、そのように「忘れるべき後ろのもの」とは何か。それは 5 節からのパウロ自身についての説明にあるように、この世における目に見える事柄、血筋や肩書ということでしょう。私たちの社会は、目に見える部分でしか人を評価しませんが、神様の評価はそうではありません。パウロは言っています。「私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義に関しては非の打ちどころのない者でした」……。自分は血筋も家柄も良く、ユダヤ教の宗教的にも熱心で、非の打ちどころがなく、周囲からも評価されていた人間だった、ということです。しかし、キリストと出会った今は、それらは無価値だと分かった。利益と思っていたことが逆に損失だった。それこそ「ゴミくずみたいなものだ」とすら言っています。

現代の社会で言えば、家柄や出身、学歴や肩書、年収などでしょうか。人の価値を序列付ける目に見えるもの、それらが人を救うのではありません。「律法」という掟を守る事が出来たから義とされる、神の目に義しいとされるのではない。何かが出来たから、出来ないから、良し悪しではない。人が神の前に義しいとされ、救われるのは、自分の力、人間の側の行動ではなく、ただ「キリストの真実による義、その真実に基づいて神から与えられる義」によるのだということです。そのようなキリストの真実に出会ったからこそ、これまで自分が頼りとしていた後ろのもの、肉の誇りはすべて忘れて、ただキリストの真実に全身全霊で向かって行きたい、というわけです。

とはいえ、こんなにも差別と暴力に満ちている社会です。そのような社会の中で、「人の価値は目に見えるものでは判断できない」ということを頭では分かっていても、やはり人を裁いてしまう自分がいます。「あの人はあんなに頑張っているけど、あの人はちっとも頑張っていない」……。それは今から約 2000 年前のフィリピの教会でもそうでした。この『フィリピの信徒への手紙』は、パウロが当時の権力者によって逮捕され、牢に閉じ込められている時に、獄中からフィリピの教会に宛てて送られた手紙だと考えられています。『使徒言行録』16 章を見ると、そこにはローマ帝国の植民都市、マケドニアの地方第一の都市として栄えていたフィリピの町の様子

が記されています。そしてフィリピの教会は、その「町の門の外」（使徒 16：13）にあったとも記されています。つまり、町を取り囲んでいる城壁の中には居場所が無い人々、町の門の中には入れてもらえないような差別されている人たち、貧しく弱くされていた人たちが、その教会の大多数だったということです。さらにそこにはその他にも、高価な「紫布を扱う商人」であったリディアという一人の女性実業家も、フィリピの教会のリーダーとして登場しますが、その教会の中には当時の世間の常識、血筋や身分、職業による分断を越えた、新しいつながり、イエス・キリストの価値観に基づいた連帯がありました。

にもかかわらず、そのような共同体の中にも、律法主義、「きちんと掟を守れているかいないか」によって、人を裁こうとする価値観がたびたび入り込みました。それが 18 節以降に書かれている言葉です。「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架の敵として歩んでいる者が多いのです」。フィリピの町から遠く離れた獄中にありながら、フィリピの町の教会の様子を伝え聞いたパウロが、涙ながらに手紙を書いた理由がここにあります。キリストの価値観に敵対する、相反する価値観がしばしば入り込んでいます。それは「彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし」とありますが、「腹」とは律法に定められた「何は食べて良い、何は食べてはいけない」という「食物規定」であり、「恥ずべきものを誇りとする」とは肉体に刻み付けた割礼こそ信仰の証だと誇るということです。

私たちは律法主義を誇り、目に見える地上のことで人を裁くのはもう終わりにしよう。パウロは遠く離れたフィリピの仲間たちに何度も呼びかけます。そして続けました。20 節です「私たちの国籍は天にあります」。ここで「国籍」と訳されている言葉は、「市民権」とも訳すことが出来ます。現代では「国籍」や「市民権」は、地理的にその国の内で生まれたら自動的に与えられるような感覚がありますが、当時はそのようなことはなく、家計や血筋、特権によって市民権は与えられました。『使徒言行録』の 22 章には、ローマ軍の大隊長が多額の金を出してローマの市民権を得たと書かれています。当時の大都市フィリピの町の教会は、町の門の外で集会をしていた程ですから、市民権を持っている人だけではなく、むしろ市民権を持っていない人の方が多かったのではないでしょうか。

そのような社会の中で、「私たちの国籍は天にあります」という言葉は、日ごろ社会の中で対等な市民として認められず、場合によっては人間としても扱われなかったような被差別の人々に対して、「あなたがたも同じ天の国の市民権を持つ一人です」という慰めを告げただけではなく、「共に天の国の市民権を与えられた者として、何が出来るか出来ないかということで、人を裁くことがないように」、今この場所において、「神の国の価値観、イエス・キリストの価値観に基づいた共同体を築いていこう」と人々を励ましたのだと思います。

「私たちの国籍は天にあります」というこの言葉は、「あなたたちも死んだら天国に行けるのだから、今はしんどくても我慢しなさい」という意味で、権力者に都合よく語られ、利用されて来た歴史があります。しかし、その本当の意味は、私たちは今この場所で、同じ天の国の市民権を持つ者同士として、共に生きることが出来る、裁き合うのではなく、お互いに大切にし合う暮らしを作っていくことが出来る、というものでした。今日の招きの詞、ヘブライ語聖書『エレミヤ書』29 章の言葉も同様でした。故郷から遠く離れたバビロニアの地に捕囚として連れて行かれて、絶望する人々に対して、諦めるのではなく、死後の世界にのみ希望を抱くのでもなく、「今この場所での暮らしを大切にしよう」と預言者エレミヤは、人々に呼びかけました。今、この土地での平安があってこそ、あなたがたにも平安があるのだから。

「国籍は天に、暮らしはこの場所に」……。今、世界的にも、日本の中でも格差と差別が拡がっています。コロナ禍による経済不況の影響が、私たちの身近な所でも、目に見えるようになって来たように感じています。私たちは毎週の礼拝を通して、「わたしたちは一人ではありません」ということを心に覚えますが、それは「私と神様の個人的な関係」、「だから私はいつでも決して一人ではない」というだけではありません。この地上でも一人で生きられる人は、誰一人としていないわけですから、私たちは隣りの人たちと一緒に生きて行こう、ということのはずです。神様は私たちと共に生きて下さっている。その神様の価値観、イエス・キリストの価値観を身につけて、今日も、これからも、この場所での暮らしを送っていくことができるように、私たちは変えられ、用いられて行きます。